

# 敬語表現の処理に関して

敬語は次のように分類されるのが普通である。

- (一) 話し手（または作者）が聞き手（または読者）に対する敬意の表現——丁寧——
- (二) 話題に関するもの

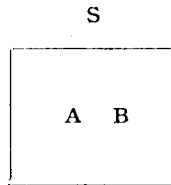
(1) 話題の内容、話題の中の人物に対して話し手（または作者）が敬意を表すもの・すなわち話し手（作者）と登場人物との関係を示すもの——尊敬——

(2) 話題の中に登場する人物相互の身分関係をあらわすもので、その人物を高めて待遇するために（こちらをへりくだった言い方をするもの）敬意をあらわすもの——謙讓——

（高等国文法 田中重太郎 昭34 初音書房）

右の説明には、次のような時枝先生の図を拝借するのが便利である。

荒 木 直 輝



説明

□は 話題である。Sは話し手（または作者）、Hは聞き手（または読者）である。ABは話題内の人物で、Aは主語、Bはそ

の動作の相手である

つまり丁寧表現はS A H、尊敬表現はA V S、謙讓表現はA A Bと、それ々々表記できるものである。例文を一つずつ示せば次のとおりである。

「夜ふけ侍りぬべし」（源氏・桐壺）S A H

その皇子うせ給ひぬ。（伊勢）A V S

まさつら（前国守に）酒よき物奉れり。（土佐）A A B

敬語の分類に関する引拠からも想像されるように、敬語表現を人間関係の認識として、待偶表現と相即的に見るのが普通である。つまり敬語表現の問題は、誰と誰との間に、いかなる待遇的差別の表現が行なわれているかということについてである。敬語の関係と種類とである。このうち、敬語の關係の認識に際して注意されるべきは、一般に指摘されているように、<sup>主</sup>話題の内と外との認別である。

①昔男ありけり。(伊勢)

②「(汝)旅の心を詠め」(伊勢)

③「(我・汝に)今宵は逢はむ」(伊勢)

①の「男」は、主語Aとして話題の内にも存在する。②の「汝」は、主語Aとして話題の内にも存在するとともに、聞き手Hとして外にも存在する。③の「我」は、主語Aとして話題の内にも存在するとともに、話し手Sとして外にも存在し、「汝」はAの動作の相手Bとして内にも存在するとともに、聞き手Hとして外にも存在する。

右のそれらに、たとえば次のような敬語を添加すれば、

④昔男侍り。

⑤「(汝)旅の心を詠み給へ。」

⑥「(我・汝に)今宵は逢ひ奉らむ」

⑦「(我・汝に)今宵は逢ひ奉り侍らむ」

④の「侍り」はS A Hである。作者Sが読者Hに対して、話題「昔男ありけり」ということの伝達態度を卑小化した表現である。

⑥の「給ふ」はA V Sである。話題内の「詠む」の主語であるAを、作者Sが尊貴化した表現である。(6)の「奉る」はA H Bである。話題内の「逢ふ」の主語であるAが、その動作の相手であるBよりも卑小化されている表現である。⑦では、さらに話題の外での卑小化表現S A Hが附加されているのである。

いわゆる「敬語法」は、「敬語表現における法則」の意味であるが、そこにはどれだけの法則性が認められるのであろうか。

雨ガ降ッテイル。

雨ガ降ッテイマス。

右の口語はともに存在する。文語でも同様である。つまり敬語表現は、行なわれたり行なわれなかったりするものである。この点「敬語法」は、敬語表現が行なわれるときの法則ではない。

ところで、敬語表現は、まず

SとHの間では

SとAの間では

AとBの間では

として表現されるのが原則である。前述の①―⑦を参照。しかし次のような表現も存在する。

「(人足が)むやみと駆けて来やアがる」

「(人足が)六十四文づゝふんだくりやがった」(ともに東海道中膝栗毛)

右は原則的には、A V Sとして「駆けていらっしやる、お取りなされた」などとあるところであるが、本文のとおりならば、A A Sとでも表記されねばならない。

「それを取りて、(我に)奉りたらむ人には、願はむ事かなへ  
む」

「興あることを(汝は)我に申したり」(ともに竹取)

右での「我」はともに話し手自身であるから、それぞれ「賜ひたらむ人には、宣給ひたり」などとして、A V S 表現するのがいわゆる敬語表現のエチケットであろうに、本文のとおりならば、「人・汝」を「我」よりも卑小化した表現になっているのである。

以上のような表現は尊大表現と呼ばれるものである。

敬語表現における原則的なものの第二として、次の二点が考えられる。

一般にも指摘されているように、一動詞に関する敬語表現の実現の順序は、A A B、A V S、S A H である。たとえば、

一の宮を見奉らせ給ふにも、若宮の御恋しさのみおもしろいで  
つつ、(源氏・桐壺)

故大納言、今はとなるまで、ただ「…(略)」と、かへすゞい  
さめおかれ侍りしかば、(源氏・桐壺)

前者の「奉ら」はA A B、「せ」「給ふ」はともにA V S である。後者の「れ」はA V S、「侍り」はS A H である。A V S が A A B に、S A H が A V S に先行して「見給ひ奉る、いさめおき侍られしかば」などと表現されないのが原則である。

第二点は、存在を意味する動詞および補助動詞であるときの「侍り」「候」についても同様)についてである。この場合の「侍り」

はS A Hと考えられ、したがって話題内の主語Aは、無生物であっても抽象的事物であってもよいわけである。

さること侍りき。(徒然・115段)

夜ふけ侍りぬべし。(源氏・桐壺)

このような性質は、たとえばA V S である「給ふ」やA A B である「奉る」などにはないものである。これを仮りに「侍り」の汎用性と呼ぶならば、それは、その実現の順序がつねにA A B や A V S に後行するいわば終尾性とともな「侍り」の二大特質である。

ところで、冒頭にも引掲したように、敬語表現は丁寧・尊敬・謙讓の三つに分類され、それらはS A H・A V S・A A B と表記されるのであったが、これに関してやや詳しく検討すれば次のようである。

たとえば「申す」は謙讓語として、古語辞典(旺文社 昭35)には大略次のように説く。

① 「言ふ・告ぐ」の謙讓語

② 「請ふ・願ふ」の謙讓語

③ ……と申しあげる、……とおっしゃる(人名称呼)

④ 自己の動作を表わす動詞に添えて、謙讓の意を示す。

右のうち、③は貴人の氏名を示す場合で、A V S と表記さるべき特殊なものである。①②③は動詞、④は補助動詞である。

いま「申す」の具体的な用例の幾つかを指摘すれば、次のようである。

①おとど、殿におはしけるに、落篋をさしのぞきて見給へば、なりのいとあしくて、さすがに髪のいとうつくしげにて、かより

て居たるを、あはれとや見給ひけむ、「……(略)」と宣へど、  
(姫君)恥しうて物も申されず。(落窪・巻一)

② 帶刀、大将殿に参りたれば、「(少将君) (帶刀) いかにぞいひ侍りしかば、云々なむ申す。……(略)」(落窪・巻一)

③ 忠こそ「今はかく鳥獸にまじりて、年久しくなりぬれば、御覽じ忘れにたらむとなん思ひ給ふる。年頃かゝる山伏になりてなん。あが君は何の御位にかおはしますらん」ととゞ「只今は納言になん侍るめる。あやし、年頃いかになり給ひにけん」と申侍りつるに、かく悲しげにこそはものし給ひけれ。抑々いかなる御心にてかは、かくおぼしたちつらん」(宇津保・梅の花笠)

④ 「その後の夜せめおとさむとおもひて、まうで来てあくるに、内ざしにさして、更にあかぬを、板の上に夜中まで立ちゐ、あけ侍りし程に、風ひきて腹のごほん」と申ししを、一二度は聞き過じて、猶もしうねく開けむとし侍りし程に、……(略)」(落窪・巻二)

⑤ 阿闍梨「今、幾許もあらじ」と見給へば「世に経給はん限りはいたはり奉らん。後の戸をも収め地獄の苦しびをも救ひ申さむ」との給ひて、小き小屋作りて、こめ据ゑて、物食はせ、衣著せなどして養ふ。(宇津保・吹上・下)

⑥ 「この家の券うしなひ侍りて、尋ね申し侍れど、いまだ聞き出で侍らず、もしそれを人の死りて侍るにやあらむ。只その疑のみ侍る。さてこの家、領すべき人なむ侍らぬ」(落窪・巻三)

右の①②③の「申す」は動詞「言う」の意であるが、その敬語表現は全くの一樣なのではない。④は姫君がおとどに言うのであり、

敬語表現も姫君Aおとど、つまりAΛBである。

⑤では「申す」の主語は安濃、彼女は帶刀の妻、帶刀は少将君の侍臣であるが、「申す」による敬語表現は、安濃Λ帶刀つまりAΛBとしての尊大表現ではなく、妻安濃の行為なので聞き手である少将君に対して卑小化したものと考えるべきであろう。つまりAΛHと表記されるのが正確であろう。

⑥の「申す」は、私が汝(忠こそ)のことを人々に言う意であるが、その敬語表現は私Λ人々、つまりAΛBではなく、「申す」の内容が忠こそそのことに關してゆえにの卑小化と考えられる。右では忠こそは聞き手Hとして話題の外にも存在するが、「申す」の内容(これをCとする)として話題の内にも存在している。「申す」は内容に關してゆえの卑小化なので、表記はAΛCとあるのが正確であろう。

⑦の「申す」は、腹がごほん」と「いう・鳴る」の意であるが、冒頭の引揚などにも見られたように、敬語表現を人間関係の識別とするためえからは、主語「腹」は敬語関係の一方に立ちえないと考へねばならない。つまり「申す」による卑小化は主語A(腹)としてではなく、話し手Sが聞き手Hにその伝達態度を卑小化したもの、つまりSΛHと考えるのが至当であろう。「腹ガゴホムト鳴リマシタノヲ」とでも訳するところである。

⑧は補助動詞であるが、⑧の敬語表現は「救ふ」の主語A(私・阿闍梨)Λその相手B(汝・乞食)としてである。しかし⑨にあつては、「尋ね」の主語A(私・越前守)の動作を聞き手H(衛門督)に卑小化したもので、AΛHと表記さるべきである。

一方「給ふ」(下二段活用)について古語辞典(角川書店昭32)

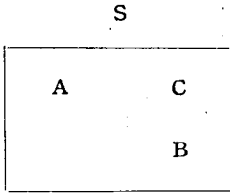
には、大要次のごとく見える。

①その動作の対象に対し、自己の動作をへりくだって表わす謙讓語。  
語。

②話し相手に対し、自己の動作をへりくだって表わす謙讓語。一  
説に丁寧語。

右の当否は一応別として、②は明らかにAΛHと表記されるものである。①に示された例文「かの大納言のみ女、ものし給ふと聞き給へしは」(イラッシャルトウカガイマシタノハ) (源氏・若紫)の趣旨によれば、この例文はAΛCと表記さるべきなのである。

以上の考察からも想像されるように、冒頭に敬語の三種を引掲し、それらを時枝先生の図説を借りて、SΛH・AVS・AΛBと表記したのであるが、敬語表現のより実際的のものは、次のように補正されねばならないと考えられる。



説明

小文No.2の図参照。

CはAの動作の内容での主体。

敬語表現の種類

SΛH    AΛV    AΛB    AΛC    AΛH

敬語表現は方法的には、一方を積極的に尊貴化する消極的に卑小化するかの二つしかありえない。前者はAVSと表記されるものであるが、後者はSΛH・AΛB・AΛC・AΛHなどと、きわめて多岐である。そしてこれらの多岐にわたる卑小化語の主たるものは「申す・聞ゆ・参る・罷る・侍り(候ふ)」などである。いまそれらの卑小化状態の例の幾つかを示せば、次のようである。

申す

①「(我)翁の(汝・赫映姫に)申さむことを聞き給ひてむや」  
(竹取)

②「あやし、(汝)年頃いかになり給ひにけんと(我・人々に)申し侍りつるに、かく悲しげにこそはものし給ひけれ」(宇津保・梅の花笠)

③「口惜しくこの幼き者(注・赫映姫のこと)は、こはく侍るものにて、(汝・勅使に)対面すまじきと(我に)申す」(竹取)  
④「板の上に夜申まで立ち居、あげ侍りし程に、風ひきて(我が)腹のごほくと申ししを…(略)」(落窪)

右は動詞であるが、③はAΛB、④はAΛC(小文No.2参照)、⑤はAΛH、⑥はSΛHと表記さるべきものである。⑤は話題の内部における「汝勅使」への卑小化と考えられるかもしれないが、それならば「対面し奉る」などとして実現さるべきである。

⑥「親のたまふ事を、ひたぶるに(我)いなみ申さむことといとほしさに、…(略)」(竹取)

⑦「この家の券(我)うしなひ侍りて、尋ね申し侍れど、いまだ聞き入れ侍らず」(落窪)

右は補助動詞であるが、㊦はAΛB、㊧はAΛH（小文之。に参照）と表記さるべきものである。

【聞ゆ】

①「餅は何の料に乞ひつるぞ」と宜へば、うちゑみて「猶あるやうありてなむ」と聞ゆ。（落窪）

②「さばかり（帝も）おぼしたれど、限りこそありけれ」と世の人も（相互に）聞え、（源氏・桐壺）

右は動詞であるが、㊨はAΛB、㊩はAΛCと表記さるべきものである。㊪は世人AΛ世人Bとしてでなく、話題の内容の主体Cが帝であるので、帝に対して卑小化したものと考えられるからである。

⑬「（我）（汝を）竹の中より見つけきこえたりしかど、菜種の大きさはせしを、我が丈たち並ぶまで養ひ奉りたる我が子を、何人か迎へ聞えむ」（竹取）

右は補助動詞であるが、二例ともにAΛBと表記さるべきものである。

【参る】

⑭「拵刀もいとほしうて、少将君の御前にも参らず、籠りゐたり。」

（落窪）

⑮人々笑ひて、「扇の風だに参れば、（姫君は）いみじき事におぼいたるを、ほと／＼しくこそ吹き乱り侍りにしか。この御殿あつかひに、（我ら）わびにて侍り」など（夕霧に）語る。

（源氏・野分）

右は動詞であるが、㊫はAΛB、㊬はSΛHと表記さるべきものである。㊭は「扇で煽ぎ申しあげてさえ」としてAΛBとも考えられるが、「扇の風が吹いて来てさへ」（対校源氏物語 吉沢義則 卷三二二頁頭注）の意である。非人間である「扇の風」は敬語関係の一方に立ちえないから、敬語表現はSΛHと考えねばならない。あるいは「扇が風を献上してさえ」「扇の風が参上してさえ」とも解せられるが、ここでは擬人法的修辭と見て、A（扇または扇の風）ΛB（姫）と戲態的に考えるべきであるかもしれない。

⑯「よべは内裏に参りてなむ、（我・こちらへ）え参り来すなりにし。」（落窪）

⑰「御あへつらひ（注「手伝」）仕うまつり侍らむ、と思ひ給ふるを、頼の事とて、人（我が許に）まうで来たれば、（汝に）聞えさする事のこりも、まだ多かり。」（落窪）

⑱「あななひにおどろおどろしく二十人の人の上りて侍れば、（燕は）あれて寄りまうで来ず。」（竹取）

⑲「みだりがはしき事（注・糞を漏らしたこと）の、出でまうで来にしかば、物もおおへで、まづ退り出でて、…（略）」（落窪）

右は補助動詞であるが、㊮はAΛB、㊯はAΛH、㊰はSΛHと表記さるべきものである。㊱は「人AΛ我B」の尊大表現ではなく、卑小化の対象は聞き手Hに対してである。非情物（燕）や抽象的事物（脱糞）は敬語関係の一方に立ちえないから、㊲はもとSΛHと考えるべきなのである。

【能る】

② 「我が君に仕うまつらむと思ひてこそ、親しき人のむかふるにも（我は汝が許を）まからざりつれ」（落窪）

③ 「（我）あからさまに物へまかりたりしまに、きたなく侍る所の繞け侍りしかば：（略）」（枕草子段）

④ 「（雀は）いづかたへかまかりぬる。いとほしうやうやうなりるものを」（源氏・若紫）

右は動詞であるが、②はA△B、③はA△H、④はS△Hと表記されるべきものである。①は貴人の許を離去するの意ではなく、所用で外出することを聞き手Hに卑小化したものである。非情物（雀）は敬語関係の一方に立ちえないから、②はS△Hと考えるべきなのである。

⑤ おのおの仰承りて（大納言の許を）罷り出でぬ。（竹取）

⑥ 楯取答へて申す。「こゝら船に乗りて（我）まかり歩くに、まだかくわびしき目を見ず」（竹取）

⑦ はやき風吹きて、（略）船を海の中にまかり出でぬべく吹き廻して、（竹取）

右は補助動詞であるが、②はA△B、③はA△H、④はS△Hと表記されるべきものである。⑤は貴人の許を離去しての意を示すのではなく、敬意の対象を聞き手Hにおいたものである。非情物（風）は敬語関係の一方に立ちえないから、⑦はS△Hと考えるべきである。

侍り（候）も

⑧ 「物怖ろしき夜のさまなめるを、（我）宿直人にて侍らむ」

（源氏・若紫）

⑨ 宮司、さぶらふ人々、みな手を分ちて求め奉れども、身まかりもやし給ひけむ、え見つけ奉らずなりぬ。（竹取）

右は動詞で、貴人に「伺候スル」意を示し、敬語表現はA△Bと表記されるべきものである。

⑩ 「（我家は）せばき所に侍れば、（汝に對し）なめげなる事や侍らむ」（源氏・帚木）

⑪ 「いかなる所にか、この木はさぶらひけむ」（竹取）

右は動詞で、「存在スル」意を示すが、主語Aが抽象的事物（事）や非情物（木）であることから明瞭なように、敬語表現はS△Hと表記されるべきものである。

⑫ 「大炊寮の飯炊ぐ屋の棟のつくの穴毎に燕は巢くひ侍り」（竹取）

⑬ 「夜ふけ侍りぬべし」（源氏・桐壺）

⑭ 「楯君の御前のもの（注・器具のこと）は、例のやうにては、にくげにさぶらはむ。」（枕草子段）

右は補助動詞であるが、主語Aが、「燕・夜・器具」であることから明瞭なように、敬語表現はS△Hと表記されるべきものである。

ところで、主語Aが人間である場合の敬語表現の解釈には、人によって異説があるようである。

「こころの日ごろ思ひわび侍りつる心は今日なむおちあぬる」

（竹取）

右を「竹取物語の文法」（武田祐吉・上田知雄共著 明治書院）

は、「自分の動作の謙讓語である」と注しているが、

「ここなる物(我)とり侍らむ」などいひ寄り、走り打ちて逃ぐれば(枕3段)

右は主語が一人称であるが、「枕草子の文法」(湯沢幸吉郎・三浦和雄共著 明治書院)は丁寧語であるとしている。

以上のような異った理解の成立する一因は、「丁寧語が敬語の一種類と認められたのは比較的新しいので、その範囲も本質も分明ではない」<sup>注1)</sup>点にもあるが、また「侍り」「候」も自身にも原因がないわけではない。

存在を意味する動詞および補助動詞である場合にあっては、主語Aが人間であるときは「侍り」はA自身にも卑小的影響を与えるものであったと考えられる。平安朝中期頃にあつては、Aが絶対的尊者である場合は「侍り」はつかないといわれ、またAが二人称である場合には、「侍り」はその動作に直結しなかつたようである。

(少将君)片側みて笠を垂れかけて行けば、雑色ども (…略) (…いき過ぐるまゝに「かく(汝)立てるはなぞ。居侍れ」とて、笠をほとと打てば、(落窪)

右は少将君が姿をやつして姫君に通う途上、雑色から盗人と見誤られて譴責されている場面であるが、「日本古典文学大系13」

(一九五七年)岩波書店刊)は「坐ッテオレ」と訳している。これは主語A(二人称・少将君)を卑小化することから、尊大表現となつているためなのであろう。

つまり主語Aが人間である場合(必ずしも一人称には限らず)は、存在を示す動詞および補助動詞の「侍り」「候」も)の敬語表現は、S^A H^とともA^A H^をも含むのが本来のものであつたと考

えられる。

母君  
「(夫)故大納言、今はとなるまで、ただ『(略)』と、かへすくいさめおかれ侍りしかば」(源氏・桐壺)

右ではまず「れ」によつてA V^Sとして夫を尊貴化し、他方、「侍り」によつてS^A H^としての伝達態度を卑小化しつゝ、またA^A H^として聞き手に夫自身をも卑小化しているものと考えられる。したがつてこのような表現は絶対的尊者がAである場合には行なわれず、またAが二人称である場合にも行なわれなかつたのである。 「侍り」「候」も)にこのような制限のなくなるのは平安朝も末期ごろからと考えられる。

既に見たように、卑小化表現の敬語関係は多彩であるが、一応次のような解釈の原理を想定することができるようである。

(一)Aが非情物マタハ抽象的事物デアルトキハS^A H^デア。 図説ハ次ノヨウニナル。



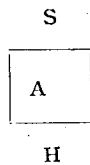
「あななひにおどろおどろしく二十人の人の上りて侍れば、(燕)あれて寄りまうで来ず」(竹取)

敬語表現は人間関係の識別であると考える時、右での敬語関係はS^A H^としてしか成立しないことになる。

(二)Aが人間(もちろん神仏なども含む)デアルトキ、  
(1)Bガナイ、又ハ敬語関係ノ一方ニ立タナイ場合ハ、A^A H^デア  
ル。コレハS^A H^ヲモ含ンデイルト考エラレル。 図説ハ次ノヨ



ウデアル。



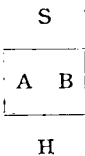
楫取答へて申す。「こゝら船に乗りてまかり歩くに、まだかくわびしき目を見ず」(竹取)

御隨身つい居て「かの白く咲けるをなむ夕顔と申し侍る。(…略)」と(源氏君に)申す。(源氏・夕顔)

「まかり歩く」は遣(B)を出航することであるが、敬語関係の一方に立つものではなく、右はA∧Hつまり自己の行動を聞き手に卑小化したものである。「申す」は世人相互にであるが、右はA∧Bとしてではなく、卑小化は聞き手Hに対してと見るべきである。つまりA∧Hである。これらはS∧Hつまり伝達態度の卑小化をも含んでいるが、さらに明示するには「侍り」を添加するのである。「申し侍り」がそれである。

(2) Bガ敬語関係ノ一方ニ立ツトキハA∧Bデアル。(但シCガナイ、マタハ敬語関係ノ一方ニ立タナイトキデアル)。

図説ハ次ノヨウデアル。



「翁の(汝・赫映姫に)申さむことを聞き給ひてむや」(竹取)

(3) Cニ関シテハ

① Cガ敬語関係ノ一方ニ立タナイトキハA∧B、マタハA∧Hデアル。図説ハ前出ノ(1)(2)ニ同じ。

◎ Cガ敬語関係ノ一方ニ立チ得ルトキ、

(伊) Cガ高貴者ナラバ、A∧Cガ優先。

(呂) ソウデナイモノハ、A∧Bガ優先。

御隨身つい居て「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申し侍る。

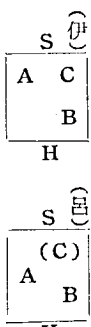
(略)」と(源氏君に)申す。(源氏・夕顔)

前者の動作は世人相互(A・B)においてであり、Cは夕顔であるが、夕顔は敬語関係の一方に立たない。また卑小化は世人A∧世人Bとしてではなく、聞き手(源氏君)に対してのA∧Hと考えられる。後者の動作は隨身が源氏君に対してであり、Cは世人であるが、敬語表現のA∧Bと考えられるのは、CがB(源氏君)よりも尊貴的と考えられないからである。

「さばかり(帝は)思したれど、限りこそありけれ」と、世の人も聞え、女御も御心落ちる給ひぬ。(源氏・桐壺)

(命婦は) ややためらひて(源氏の祖母君に、帝の) 仰言伝へ聞ゆ。(源氏・桐壺)

前者の動作は世人の相互(A・B)においてであり、Cは帝であるが、敬語表現のA∧Cと考えられるのは、CがBよりも尊貴的だからである。後者の動作は命婦が北の方に対してであり、Cは帝である。敬語表現は一応A∧Bとも考えられるが、CがBよりも尊貴的である点、A∧Cが優先すると考えられるわけである。なお(伊)(呂)の図説は次のようにならう。



説明

(C)はBよりも尊貴的でなく、したがって(2)に還元される。

(4) 存在ノ意ノ動詞オヨビ補助動詞ノ「侍り」(「候」モ)ハ、一般ニハS△Hデアルガ、平安朝中期ゴロマデハA△Hヲモ含ンダヨウデアル。(小文No.21,22参照)。

敬語表現の内容はかなり多彩的であり、行なわれている「敬語法」も必ずしも快刀乱麻を断つほどの効果を發揮しえていないようである。たとえば宇津保物語や源氏物語などに幾つか見える「動詞⊕侍り給ふ(または「たうぶ」)」の説明の困難さのごとき、あるいは下二段活用する「給ふ」を謙讓語とするか丁寧語とするか、あるいは主語が一人称であるときの「動詞⊕侍り」は謙讓語であるか丁寧語であるかのごときである。(但し後の二者については小文注⑥参照)。小稿にあっては、敬語表現の解釈の一般的目安を企図したにすぎない。

注

- ① 国語学原論 時枝誠記 岩波書店 昭17 第五章 敬語論参照
- ② ①および「解釈と鑑賞」 昭31年5月号参照
- ③ ①に同じ
- ④ 宇津保物語や源氏物語に「動詞⊕侍り給ふ」の例が幾つか見えるが、特例的なものと考えられる。(日本古典文学大系10 宇津保物語の補注23頁参照)
- ⑤ たとえば「うへ(帝のこと)も御涙のひまもなく流れおほしますを」(源氏・桐壺)「宮は白き御衣どもに紅の唐綾をぞ上にたてまつりたる。御髪のかからせたまへるなど」(枕・宮にはじめての段)のように、「涙・髪」などを主語にし

た敬語表現がしばしばみえるが、それはAVSとしてである。

⑦ 小考によれば例文のものはA△Hと考えるべきである。これについては「国文学 学燈社 昭35年9月号」に小文を發表したことがある。ところで「A△」に着眼すれば謙讓語ということになるであろうが、「△H」に着眼すれば丁寧語ということになるであろう。しかしこの「給ふ」は他の謙讓の補助動詞「奉る・参る」などと重用しない点、あるいは汎用性と終尾性(小文No.6,7参照)とを持たない点から、謙讓語の一つと見るべきであろう。存在の意の動詞および補助動詞の「侍り」の主語が人間である場合は、A△Hをも含むと考えられるが、他の謙讓の補助動詞と重用する点、あるいは汎用性と終尾性を持つ点で丁寧語と考えるべきなのである。

⑧ 国語学辞典 東京堂「丁寧語」の項

(大阪府三国丘高等学校教諭)